これからどうなるBankART1929

（左から）BankART1929の津澤峻さん、代表・細淵太麻紀さん、副代表・秋元康幸さん、泰有社・伊藤康文。撮影はBankART Stationにて。

BankART1929 細淵太麻紀 秋元康幸 津澤峻

株式会社泰有社 伊藤康文

横浜市の創造都市政策の代表的なプロジェクトだった「BankART 1929」が、3月末で「BankART Station」と「BankART KAIKO」での活動を終えることに。「これからどうなる」をテーマに、BankART 1929と泰有社の座談会をお届けします。

聞き手・執筆：中尾江利（voids）　写真：小林璃代子

BankART1929と泰有社

細淵　2011年の東日本大震災後に、海外や遠方から招聘したアーティストの滞在場所を借りる目的でBankART1929前代表の池田修とともに泰生ビルを内見し、契約しました。同ビルに入居する「NPO法人コミュニティデザイン・ラボ」の杉浦裕樹さんに勧められたのですよ。

伊藤　泰生ビルは1967年に建てた古いビルで、リーマンショック後は空室が多かった。そんななか、新聞で「芸術不動産」プロジェクトが取り上げられていて、アーティストやクリエイターの誘致を条件に、リノベーション助成を得られると知りました。その後、アーツコミッション・ヨコハマに杉浦さんをつなげてもらい、クリエイターの入居が増えたんです。セルフリノベを推奨し、家賃を抑えて間口を広げています。

官から民へ

細淵　BankARTは横浜市の創造都市政策を担いつつ組織としては民間のNPOなので、市の補助金を貰い、それを原資として自分たちでお金を生み出してきました。だから官民どちらの考え方もわかる。泰有社さんのように民間企業としてのマネジメントをしながらアーティストを支援するのは、相当な志がないとやっていけない。「北仲BRICK＆北仲WHITE」などはBankARTが大家と契約し、住民との間に入ってコーディネートや家賃・光熱費の徴収などもしましたが、BankARTはそこからお金を得てはいません。それは、市との協定で、管理する建物内での文化活動だけでなく、芸術文化を通してまちににぎわいをつくることがミッションだったから。ですが、これからは市の補助金という大きな原資がなくなるので、BankARTの経済の考え方を根本から変えなくてはならないのが課題です。

秋元　池田さんの時代は横浜の創造都市全体の経済構造を模索していたときだったんですよね。彼は「横浜の経済は横浜で回せ」という考え方をもっていて、物件をもつ不動産会社が儲かるようにできないと創造界隈は永続しないと考えていました。泰有社さんの取り組みは横浜の創造都市政策の成果の一つだと思います。

伊藤　泰有社はBankARTさんの歴史をなぞっているのかもしれません。BankARTさんが仕掛けたシェアオフィスにいた建築家の多くが泰生ビルやトキワビルに事務所を構えていますし、先駆者がいたことはありがたいです。

これからどこへ？

津澤　BankART Stationの運営者公募不採択を知ったときは「この大量の荷物をどこにどうしたらいいんだ？！」と最初に思いました（笑）。活動継続のためのクラウドファンディングでは、金銭的支援だけでなく、荷物の移転先や新拠点となりそうな場所の情報、今後の仕事につながる情報なども集めています。動いていくなかで新しい経済構造や場所を探していくしかないですね。

細淵　私たちはこの20年で具体的な人々とのネットワークをつくってきました。でも、例えば「住所録登録は８万件」、「メールニュースを２万アドレスに配信」と数値化しても、市や外部の人はそのリアリティを実感しづらい。クラファンでは、それが可視化されたと思います。「BankARTは運動体である」という言葉があるのは、池田さんという強いキャラクターをもった人だけでつくられたのではなく、たくさんの人たちの協力と関わりでBankARTが成立しているから。だから、市との関係が変わっても、この20年の間に培った関係性や経験を糧にどうにかやっていけるかなと。

秋元　BankARTはそういう関係性のなかで生きていくしかない。横浜から育って他の地域に巣立ったアーティスト、クリエイターもいますし、ここに新しい血が入るのも悪いことではない。BankARTはこれからも地域の人とちゃんと付き合う意識をもっていたい。これからもおもしろいことができればいいですね。

オーナーズアイ 水谷清士版 Owner's Eye

編集部　GM2ビル4階の泰有社本社にはアート作品がたくさん飾ってありますが、なぜでしょうか？

泰有社の事務所デザインは、ナガオカケンメイさんにお願いしました。事務所ができてからは「空間だけではなく、なかに何があるか」に関心が向き、ベルギーの作家、ジャン＝リュック・モーマンのマドンナとケイト・モスの作品を買いました。最初に買ったこの作品が、最も思い出深いです。

父の影響でビンテージの時計やファッションが好きで、芸術にも関心があったのです。だからアーティストやクリエイターの入居が増えていくのを見て「楽しい」と思いました。市の文化芸術政策などの流れがあったとは思いますが、私は堅苦しいことは好きではなくて入居者が楽しめる空間をつくっただけ。時代に合っていたと思います。

今では「BankART1929」が運営した「R16スタジオ」から渡辺篤さんが入ってきて、小泉明郎さんも来てくれました。BankART1929元代表の故池田修さんや渡辺篤さんから買った作品もあります。アーティストのプレない価値観を尊敬しています。

上：ジャン＝リュック・モーマンの作品
左下：渡辺篤の作品

編集部　これからブランディングしたい場所や力を入れたいことは？

やはり私の地元の弘明寺です。今年1月には「ニューヤンキーノタムロバ」や「AKINAI GARDEN STUDIO」が中心となって「橋の上の、弘明寺市場」というマルシェが始まりました。横浜弘明寺商店街共同組合理事長などは仲良くしてくださるし、私は横浜信用金庫弘明寺支店の弘信会会長でもあるので、商店街、銀行、アーティスト・クリエイターが一体になれるといいですね。

不動産業を継いで入居者と話してわかったことは、「厳格でまちの嫌われ者だったのでは」と思っていた祖父が、まちの人に対してとても優しかったということ。地元の繁栄を考えていたのですね。祖父は時代も価値観も全く違う人です。だから、私は私なりにアートを日常にひらいて、身近にしていければと思います。

今号は泰有社オーナー水谷浩士が、自身もコレクションするアートへの思いや、泰有社のこれまでとこれからを語るオーナーズアイ！お楽しみください。

NEW! 新入居者ファイル

2024年に入居したさまざまなスペシャリティをもつ人たちをご紹介！「入居者ファイル」シリーズは、泰有社WEBで全文お読みいただけます。

全文はWEBで

磯部由佳里さん　トキワビル

写真：大野隼介

革製品や真鍮アクセサリー、ドライフラワー、流木アート――。つくりたいものはまずつくってみるが基本姿勢。デザイナーとして働きながら、休日や仕事終わりにはアトリエでものづくりに没頭する。革製品や真鍮づくりで一番好きな工程は「カービング」と呼ばれるいわゆる「彫り」の作業。職人として、日々試行錯誤中だ。

船本由佳さん（ライフデザインラボ）　泰生ポーチ

写真：壹原康太

「ライフステージの変化で悩んでいる人たちが自信をもって次の人生を歩めるように」。そんな願いを込めて発足したライフデザインラボの所長を務める。まちなかで助け合えるつながりをつくれるように、子育て当事者目線で考えるまちづくりや防災、メディア発信など多様な活動を展開中。誰もが一歩踏み出せる場づくりを目指す。

2025年4月11日発行　発行：株式会社 泰有社　企画・編集・デザイン：株式会社 ボイズ　印刷：株式会社 ココラボ

INFORMATION → 2024 SPRING-WINTER

泰有社コミュニティの動き

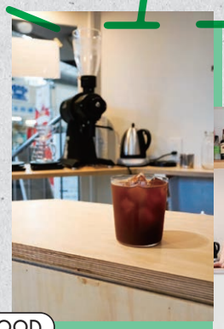
BOOK

『横濱建築』にて泰有社が紹介されました

『横濱建築 記憶をつなぐ建物と暮らし』で、当社と当社がもつビンテージビルを取り上げていただきました。

『横濱建築 記憶をつなぐ建物と暮らし』
2,200円（本体2,000円＋税）／
株式会社トゥーヴァージンズ

FOOD



PEACH COFFEEが水谷ビル1階でオープン！

水谷マンション1階で、コーヒースタンド『PEACH COFFEE』が8月17日にオープンしました。「まるでフルーツのようなコーヒー」をコンセプトに個性豊かなスペシャルティコーヒーをお届け。内装は同じく水谷ビルに事務所を構える建築設計事務所「AKINAI GARDEN STUDIO」が担当しています。

水谷ビル PEACH COFFEE

所在地：神奈川県横浜市南区弘明寺町 144-1 水谷マンション105
営業時間：11:00～20:00　＊日曜・祝日のみ17:00まで
定休日：月曜
アクセス：横浜市営地下鉄ブルーライン弘明寺駅から徒歩約3分 または京浜急行線弘明寺駅から徒歩約5分

ART

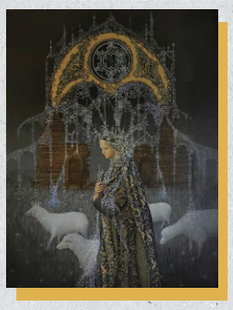
入居アーティストが活躍中

泰生ビル 似て非works

似て非worksさんが「第98回東京インターナショナルギフト・ショー 秋2024」の「第16回 LIFE×DESIGN」に出展。「SITE BAY YOKOHAMA」のドラム缶や「karenu」の植栽と花器を再生した作品は、「LIFE×DESIGN」アワードにて「サステナビリティー賞」を受賞。同作品はcrQlr Awards 2024「Already There Award」も同時受賞しました。

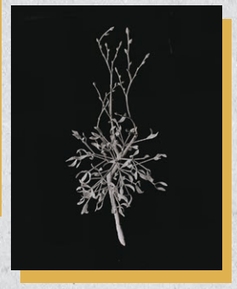
GM2ビル
ニューヤンキーノタムロバ

ニューヤンキーノタムロバのコミュニティビルダー・飯島大地さんが個展『飯島大地』を開催。会場はGM2ビルの「アートスタジオ アイムヒア」。制作にあたっては、“裸の自分”を表現しようと奮闘したそうです。



トキワビル MERINO

テンペラ画家MERINOさんは2024年、大阪や京都などでグループ展に出展し、新作を発表。卵黄テンペラ画という古典的な絵画技法で製作しています。卵黄と顔料を混ぜた絵の具による繊細なタッチが特徴。MERINOさんは架空の村と人々をテーマに描き続けています。



トキワビル utopiano

観察した植物から型紙をつくり布で草花の形をつくりあげる布花作家のutopianoさんは、非公開のアトリエを月1回、展示室としてオープン。画家やイラストレーターなどが個展を開催し、ゲスト作家による作品販売も行っています。

BOOK

「編集の教室」始動

トキワビル 株式会社クラフトワークス 齊藤睦志

編集プロダクション「株式会社クラフトワークス」が「編集の教室」を始動予定。次世代の編集者やライターに向けた編集の仕事を学べる実践講座です。編集・出版業界について学ぶ講義や、実践的なワークショップなどを交えて、技術と知識を身につけていきます。ご興味のある方、編集者・ライター志望の方はふるってご参加ください。

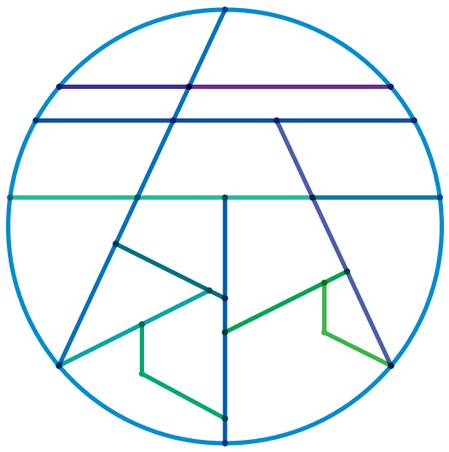
関内・弘明寺エリアにあるビルで活動する入居者の活動をご紹介！ まちづくり、建築、アート、食などさまざまなスペシャリティをもつ入居者たちのニュースです。

TAIYUSHA NEWS
街の未来を考える
https://taiyusha.co.jp/

泰有通信 vol.08

2024, Spring - Winter

泰有社が発行する創造拠点の最新ニュース



私たちは不動産事業をとおして、コミュニティをはぐくむまちづくりに取り組んできました。『泰有通信』では入居アーティスト・クリエイターなどの活動を紹介しています。

2024年は変化の年。2009年から始まった関内外クリエイターの文化祭「関内外OPEN!」の幹事チームメンバーが、若手のクリエイターやまちづくりの担い手にバトンタッチ。また、弘明寺では水谷ビルに「PEACH COFFEE」がオープンし、弘明寺かんのん通り商店街を巻き込んだマルシェ「橋の上の、弘明寺市場」の動きも起き始めています。

さらに、20年にわたって創造都市・横浜を牽引してきたオルタナティブスペース「BankART1929」は、「BankART Station」および「BankART KAIKO」での活動を2024年度末に終了。あらためて泰有社との関わりを振り返りながら、これからのBankART1929の行方や活動のあり方をざっくばらんに語る座談会を収録しました。

関内・弘明寺エリアの各拠点の出来事やニュースを伝える『泰有通信vol.8』をぜひお楽しみください！

泰有社からの質問

トキワ／シンコービルの建築家・ランドスケープアーキテクトへ

災害、高齢化、気候変動——。世のなかの出来事にクリエイターはどのように応答しながら仕事をしているのでしょうか？　今回は、建築家やランドスケープアーキテクトに宛てて質問を投げかけました。

Q. あなたが関心をもつ社会の課題は？

建築家・ランドスケープアーキテクトが15団体
→うち12団体がトキワ／シンコービルに入居

泰有社がもつ5つのビルに入居する企業や個人事業主は全109団体*。うち、建築家・ランドスケープアーキテクトが15団体で、そのなかの12団体がトキワ／シンコービルに入居しています。
＊個人の住居は除く

浅沼秀治

建築家／Team ZOO アトリエモビル／NPO有形デザイン機構

コルビュジェが語ったユニバーサリズムに対し、
建築家としての自身を
クリティカル・リージョナリズム（批判的地域主義）の系譜に位置付ける。
固有の伝統などの地域性から出発し、
社会的な存在として建築を捉える。

批判的地域主義　# サードプレイス　# コモン

江原河畔劇場のロビーからエントランス

「コモン」を意識した場所づくりを考えています。豊岡市の江原河畔劇場では、劇場のロビーを家の食堂のように集える場所として計画し、地域のサードプレイスとなるようにしました。住宅では、そのコモンとも言える縁側空間を考慮し、環境問題として薪ストーブで得られる熱を床暖房に使うシステムを導入しました。このシステム導入は施主とのDIYで、太陽熱による暖房システムも加える予定です。

横浜市中区寿町にある「横浜市寿町福祉交流センター」は建築設計事務所「小泉アトリエ」に設計協力を行いました。それまで関わっていた寿町の高齢者と福祉の経験を活かし、まちなみの連続性や地域のソフトな課題に向き合うことにしました。寿町は、高齢者福祉の課題解決のモデル地域であり全国的にも先進事例です。その課題は顕著で、センターの果たす役割は大きいものです。

「横浜市寿町福祉交流センター」は『新建築』2019年8月号に大きく掲載された

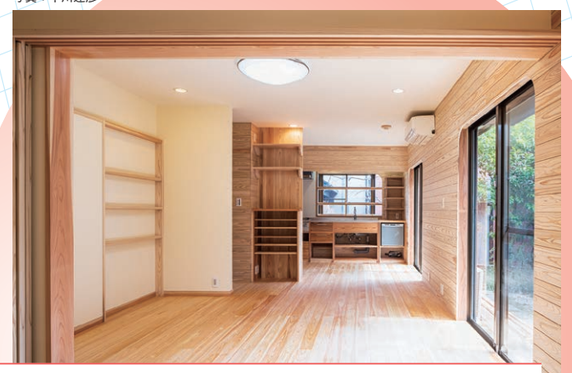
櫻井淳

まちづくり・建築／株式会社櫻井計画工房

まちづくりを知る建築家として、
個々の建築から構成されるまち並みを意識し、
その地の歴史や文化を物語る建築を生もうとする。
現在は黄金町のまちづくりも担い、
空き家のリノベーションとスタートアップ企業を
支援するシステムを設計中。

高齢者福祉　# 文化　# 歴史

個人宅の内装。蓄電池経由の照明スイッチや、コンセントをつくり分けている
写真：中川達彦



リフォームを計画していた個人宅の屋根に太陽光パネルがあったので、蓄電池を置き、LDKの照明と一部コンセントを商用電源と太陽光電源の切り替え可能としました。切り替え工事は、太陽光から自分たちで電気をつくり、防災や持続可能な社会につなげる地域活動グループ「藤野電力」に依頼。蓄電池経由の照明スイッチを設け、コンセントは色分けしてわかりやすくしています。

持続可能性　# 太陽光電源

石丸由美子

建築家／イシマル建築設計室

関わる人、ことがらに丁寧に向き合う、よくみて、きき、考えることを大切にしている。
ひとつの点から、点が集まって線や色や形が生まれるのだとしたら、
人との交わりからよい色が生まれるように、
心地よいと感じられる形、空間をつくっていく。

小笠原諸島公共事業における環境配慮マニュアルは
一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会から表彰を受けた

ランドスケープアーキテクトとして新しい「価値の創造」を大切にしています。「小笠原諸島公共事業における環境配慮マニュアル」というものを独立前の2013年に策定、2024年に2度目の改訂をしました。世界自然遺産に登録された小笠原諸島の自然環境保全に配慮した公共事業を行うための手引きです。現場の研究者やNPOにヒアリングし、動植物の生態や外来種対策、環境配慮の事例を伝えています。

自然環境保護　# 小笠原諸島

手塚一雅

ランドスケープアーキテクト／株式会社CES. 緑研究所

都市公園や自然公園の制度ができて以降、
公園や緑地というものができあがってきた。
今後は日本の人口が減少していく社会のなかで
新たな公園や緑地の利用や活用などを計画設計する。

府中の家
写真：淺川敏

社会課題と建築を切り離すことはできず、さまざまなレベルでの対応が必要だと考えています。大きな事例はありませんが、例えば、事務所を始めたときから断熱は寒冷地だけでなく、温暖地域の夏のエネルギー消費を軽減するものと考え、施主に勧めてきました。災害や高齢者に対する配慮なども常に意識しながら取り組んでいます。

断熱　# 災害　# まちなみ

前田篤伸

建築家／前田篤伸建築都市設計事務所

住宅や商業施設などの設計を手掛け、
泉区にあるレストラン設計で「第8回横浜・人・まち・デザイン賞」受賞。
敷地、近隣、まちの文化など場所の個性と利用者が求めることを読み取り、
空間化することに努めている。

あざみ野の住宅
写真：鳥村鋼一

公共　# 住宅

ひとくちに社会課題といっても、法規や行政の面から一律に求められている課題なのか、個人のレベルに影響して生まれた課題なのか色々で、私が重きを感じるのは後者です。あざみ野の住宅は、敷地分割して子世代が新たな住宅をつくる計画で、住宅地の引き継ぎ方、土地と建築のあり方などの社会課題に加えてご家族の歴史やあり方が強く反映されています。ほしのみちでは公共空間のあり方について、どのようにすれば公共は活用されるのかを考えました。

ほしのみち（日本大通りにて2022年に開催した期間限定のライトアップ）
写真：鳥村鋼一

星野千絵

建築家／CHA

建築の個別性に価値を感じ、
その奥に社会性や他者性を見出す。
住宅や商業施設などの設計を手掛け、
人にとって建築とは何なのかを思案する。

小澤亮太・濵久貴・渡部将吾

デザイナー／合同会社HOC

建築・ランドスケープ問わずデザインで
より良い未来をつくるデザインチーム。
デザイナーとしての理想は、お客さまの外的条件、
頭のなかの構想を整理して
一番有効なポイントをデザインし、
ともにワクワクする未来をつくれること。

コミュニティ　# 地方創生

地方創生や地域課題に取り組む案件が多いです。豊かな文化を活かしきれず衰退してしまう地方が多くあり、一方で、その文化を継承する若者がいます。その方たちの想いやまちづくりの手法などを蓄積し、教科書となるよう書籍出版のお手伝いもしています。また、都市部に少しでも自然環境を増やす、新たなコミュニティを創造するというテーマで、コミュニティーファームを企業と協力して一緒に展開しています。

農業振興と地方創生に取り組む兵庫県の「Awaji Nature Lab & Resort」プロジェクト構想

安田智紀

建築家／トートアーキテクツラボ

独りよがりにならず、
その人のためにできることを考える。
大切なのは常識にとらわれないこと。
遊び心を忘れないこと。
シンプルで、ありそうでなかった
デザインができればと考えている。
完成時に「新しいのに馴染んでいる」と言われることが喜び。

デジタルファブリケーション　# 地産地消

トートアーキテクツラボの事例「ハットの家」の内装。建物全体が立体的なワンルームになるよう考えた

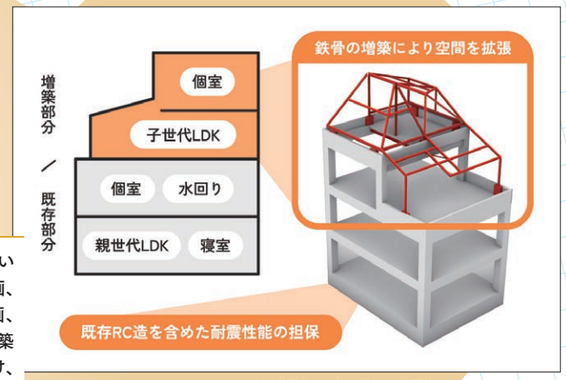
東京の地産地消を考えるため、材木屋と提携して多摩産の木材を使いました。今後は林業との接続を考えています。また、職人の人材不足もあるので、職人を必要とせずに3Dプリンターなどによって建設できるデジタルファブリケーションの研究をしています。ただ、それはそれで腕の良い職人の手を借りないとつくれないジレンマもあります。でも、なんとか実践に漕ぎ着けたいです。

村上翔

構造家／スカラデザイン

建築の構造を安全に設計することを大前提とし、
そこに+αの価値を生み出すことを重視している。
構造設計を専門的な技術にとどめず、
広く共有される「ひらかれた知」として捉え、
他者との対話を通じて再構築する。
その対話のなかで、構造と意匠が自然に融合することで、
建築の豊かさが生まれると考えている。

構造　# 耐震



店舗併用住宅から2世帯の共同住宅へ｜小屋を被るビル
構造設計：スカラデザイン
意匠設計：PERSIMMON HILLS architects

既存建物のストック活用に積極的に取り組んでいます。具体的な事例として、古い木造空き家を耐震補強しつつ、地域にひらかれた店舗やギャラリーへと改修する計画、建物の余剰容積を活かした増築により、都市型の二世帯住宅へと再生する計画、私立学校の学生寮の耐震改修などがあります。これらの改修設計においては、建築構造の専門家として、耐震に対する考え方から構造デザインの豊かさにも意識を向け、施主に直接説明する機会を積極的に設けるように努めています。